第19号　20円
昭和45年1月25日

内　容

縁—出会いの成立…… 1
5周年記念のさきがけ… 2
年の瀬の楽しい集い…… 2
千人会…… 3
第25・26回大学共同セミナー…… 4
造形の仕事…… 5
虚学に託して…… 6
学生自主セミナー…… 7
寄贈図書…… 8
利用状況…… 8

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人 大学セミナー・ハウス
《所在地》
東京都八王子市下柚木
電話 0426—76—8511～2
《東京事務所》
東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京(270)4431
振替口座 東京74590番
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

縁（えにし）—出会いの成立—

国学院大学教授
三枝充悳

キリスト教の中心が神にあるということは、どなたもご承知のとおりです。中世以来の西洋哲学は、神の存在の証明に熱中し、それに抗して神の死を叫びつづけたニーチェは、ついに発狂し（もっともこれは梅毒のせいともいわれていますが）、あるいはまたドストエフスキーをはじめ多くの文豪の文学作品のなかには、神をめぐる問題が、そのまま人間はなんのために生きるか、いかに生くべきかという問題につらなっています。

このキリスト教の神に相当するものを仏教に求めたならば、はたしてなんであるかを問うてみますと、「仏」という語も浮かんできますが、私は、これに「縁」ということばをもって答えたいと思います。

通常「縁」は、仏教では「縁起」という術語で表現されてきました。縁起とは「縁あって起こっていること」と説明されていますから、ただ縁といっても、それほどのへだたりはありません。また縁は、インド仏教の初期においては、因と区別なく使われて、因縁という術語もあります。しかしそれらから、とくに「縁」の考えをとり出して、みなさんにご紹介したいと思います。

縁を因とならべてみますと、因が原因であるのに対して、縁は条件ということができます。因が果にいたり、果をむすぶのを支えているのが、条件すなわち縁なのです。

さらにくわしく縁をみてみますと、大きくわけてつぎの二種類の縁があります。たとえば、タネから芽が出るという場合を考えてみましょう。タネは因であり、芽は果であって、タネと芽とは直結しているかのようにみえますが、実際はなかなかそのとおりにはいきません。タネをまいても芽が出ならば、タネは必ず芽を出すか。そうでありません。わかりきったことですけど、たとえば、カラスがとんできて、そのタネを食べてしまわないことが必要です。あるいは土中のムシなりバクテリアなりが、タネを殺さないことも、そなわっていなければなりません。すなわち、タネに対してマイナスにはたらくものが排除されること（むずかしくいえば二重否定的な例は、数多くあります。タネから芽が出るためには、どなたもご存知のように、たとえば日光が必要であり、ある温度が要求され、さらに水分もなければなりません。そのような諸条件がそろってはじめて、タネは芽を出すのです。これが縁の第一のありかたであって、いわば積極的な条件ということができます。

それならば、右のような積極的な諸条件がすべてそろっていたなもの）が、ここでみなおされて、そのようなものも当然諸条件のなかに加えられ、これらは消極的な条件ということができます。

このようにして、条件すなわち縁というのは、決して単独ではありません。考えれば考えるほど実に数多くの諸条件に支えられて因はようやく果に到達するのです。

ここに私（たち）がみなさんにお会いしているのも、実はこうした縁が無数にはたらいて、そうしてはじめてここでの出会いが成立したのです。「ご縁があって」などと申しますけれども、この縁を考えてみるときに、まことに重々無尽のものが、みなさんのまわり、私たちのまわりをとりかこみ、そのどれひとつも欠けることなく、しっかりと支えてくれて、それによって、ここでの出会いを可能にしているのであります。私たちはこの出会いを喜び、価値あるものと考えれば考えるほど、そのかたわら、縁の偉大さといいますか、縁の妙——不可思議さといいますか、そのようなものに、ただ驚歎するばかりです。

ひるがえって考えてみますと、この大学セミナー・ハウスは、まさしくこの縁に相当する、ということができます。ここに集まられたみなさんや私たちは、いってみれば、ともに因であり、果に相当するでしょう。それぞれさまざまな因が、縁あってこの丘にのぼり、そしてそれぞれに果をむすんで丘をおりて行きます。このような縁、やまとことば（？）でいえば「えにし・ゆかりの丘」に、私自身、みなさんとともに心から感謝したい気持の一端を申しあげて、ご挨拶に代えさせていただきます。（本文は「日本人とは何か」という共同セミナーの委員長をされた三枝教授が閉講の挨拶として述べられたものである。参加した学生たちに感銘を与えたセミナー・ハウスの仏教的理解である。）

五周年記念のさきがけ
新しい建築の地鎮祭を行なう

●宿舎＝七室二五人の三階建て
●教室＝大・中二つのセミナー室

文部省は、昭和四四年度予算に、当法人の研修施設補助金二、〇〇〇万円を計上された。実際は五、五〇〇万円を要するから、不足額三、五〇〇万円は明年早々に開始する募金にまつこととなる。しかし開館五周年記念を祝うことでもあり、この建物は完成すれば意義深い五周年のモニュメントとなるにちがいない。

式は現場にテントをしつらい、増田理事長のクワ入れなど、型どおりの神式によって行なわれた。

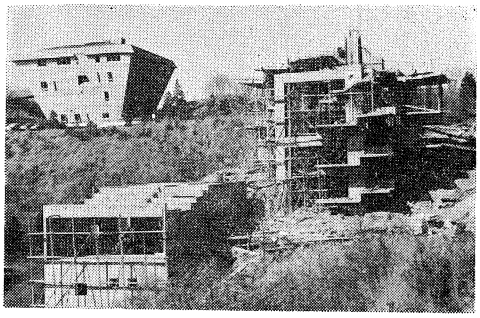
参列者には川田侃東大教授、長谷川幸男早大生産性研究所教授、星野命ICU教授、それに奉仕グループの学生たちなど約三〇名であった。

この建物は、宿舎が三階建物で、ほかに大セミナー室、卓球室、その地階が浴室、管理人室、機械室からなるセミナー館が別館としてついている。セミナー館の屋上では青空セミナーでも、パーティでもできる。この屋上からの景観はまた絶景である。

本館と講堂と真理の鐘の塔、サービスセンターの煙突、六群、七群の宿舎などをも眺めることができる。

用途は主として、五日以上滞在の長期セミナーを対象とする。それと学者グループの共同研究などには好適であろう。宿舎とセミナー室が独立して建ち、しかもひとつの群を構成するという従来のセミナー・ハウス方式は七群をもって完成し、今後は機能別に宿舎とセミナー室は建てられるであろう。

一方では海外の学生の日本研究などにも便宜を提供したいので、一ヵ月とか二ヵ月とか滞在して日本研究をされる場合もあろう。小さな学会、学者グループの合宿討議などには、最良の集会場になることは疑いない。



建築中の長期研修セミナー棟。左セミナー館、右宿舎（12月に撮影）

年の瀬の楽しい集い
山内恭彦博士の功労に感謝
昭和四四年一二月二〇日

午後六時、飯田専務理事の開会挨拶、増田四郎理事長の乾杯で開宴。しばらくご馳走の並んだ食卓をつぎつぎに回りながら腹ごしらえに多忙であった。よく食べよくしゃべったところで、まず増田理事長が、山内先生に対する心からの感謝のことばを述べる。

思えば山内先生がこの丘に初めてのぼられたのは、昭和四〇年四月二五日、建築工事の中間披露の時であった。そして同年七月五日の開館を記念しての共同セミナーで、「国民性と科学の国際性」という全体講義をなさったのである。爾来、先生がこのセミナーの丘にこられること幾度であろうか、もう先生は、すっかりセミナー・ハウスの人となってしまわれた。お元気な先生ご夫妻を、開館五年目の年末パーティに迎えて、感謝できることは大きな幸せである。山内先生ご夫妻は理事長のことばの後、満場の拍手を受けて、クリスマス・ケーキの前に立ち、「山内先生、どうもありがとう」という会衆のお礼のまなざしのなかで、お二人はにこやかに、ケーキにナイフを入れられたのである。

ここから日本女子大学の萩原清子さんと早稲田大学の森川和久君が司会となり、まず明治学院大学の岡島先生のグループによるクリスマスのカロルによって第二部にはいった。武蔵工業大学吉野ゼミの寸劇、日本原子力産業会議の片岡先生の独演、上智大学の教授グループのコーラス、そして飯田専務理事の即興の清正虎退治の対抗試合、上智のガラルダ神父のすばらしいギターの演奏などとつづき、やがてプレゼントの交換にしばらく注目し、増田理事長のキャンドルの点火、上智大学マタイス神父のクリスマスの感話があり、もろびとこぞりての日本語と英語の歌、きよしこの夜の合唱の中を屋外の行進にうつり、松下館のベル・タワーの鐘の鳴る寒い星空の下を、ローソクの火も美しく、一同松下館屋上に集合、ここで、もう一度カロルを合唱して終了。食堂にもどれば、あたたかい紅茶とケーキがあり、また話し合いが始まり、グループごとに歓を尽して一〇時半になって、ある者はセミナー室へある者は家路へ。

山内恭彦博士ご夫妻――感謝と祝福の拍手につつまれて

セミナー・ハウスに愛情を持つ卒業生や奉仕グループの学生も二〇余名参加され、また山内先生と共同セミナーをしてくださった東京工業大学の吉田夏彦先生、上智大学の鈴木皇先生も出席され、ご夫妻に対するお礼の意味を現わしてくださった。

とげとげしい気分のただようこの頃であるが、このセミナーの丘には、教師と学生が集まって、つくりだす楽しい場面がある。この夜の参会者約一七〇名。

千人会

満願はいつの日か

未だ名実伴わず

年末現在で四七九人

大学人＝七九人
社会人＝二五人

この一年の加入者

B 朝日新聞論説顧問　森　恭三殿
C 中央大学教授　村田喜代治殿
C 東京大学名誉教授　我妻　栄殿
C 大学英語教育学会会長　小川　芳男殿
C 文部省体育局長　木田　宏殿
C 東洋大学学長　磯村　英一殿
C 順天堂大学医学部事務長　石塚司農夫殿
C 専修大学助教授　桧田　信男殿
C 明治学院大学教授　佐藤　和男殿
B 文化工房代表取締役　牧田　仁殿
C 明治学院大学教授　磯部　浩一殿
C 日本大学助教授　北野　弘久殿
C フェリス女学院大学教授　堀　信一殿
C ナショナル金銭登録機社員　鳥居　照男殿
B 伯東株式会社殿
C 武蔵工業大学助教授　桑原　哲郎殿
B 早稲田大学教授　吉谷　龍一殿
C 匿名殿
C 慶応大学教授　村井　実殿
C 青山学院大学教授　尾崎　茂殿
C 東京大学助教授　鈴木　成文殿
C 日本大学教授　小林　正一殿
C 上智大助教授　吉田　裕殿
B 東京大学教授　辻　清明殿
B 東京大学教授　前田　陽一殿
A 東京教育大学教授　戸田　盛和殿
C 中央大学学生部　天野　成光殿
C 慶応大学助教授　池井　優殿
A 電気通信大学教授　大須賀政夫殿
C 主婦（新潟）　中尾由矩子殿
C 杉野女子大学助教授　田村　皖司殿
C 津田塾大学教授　井門富二夫殿
C 東京都立大学教授　宮川　松男殿
C 東京大学教授　京極　純一殿
C 東京工業大学教授　内藤　正殿
C 早稲田大学卒業生　岩橋　宣隆殿
C 慶応大学助教授　飯吉　厚夫殿
C 東京大学教授　田中　昭二殿
B 三井銀行社長　小山　五郎殿
C 文部省大学学術局長　村山　松雄殿
B 東京大学教授　秀村　欣二殿
A 吉河電機社長　吉田　公保殿
C 目白学園女子短期大学助教授　中山　昌殿
B 江渕医院院長　江渕　浩美殿
B 協和診療所長　金田　品二殿
C 立教大学教授　早坂泰次郎殿
C 日本女子大学助教授　吉沢　英子殿
C 東京大学教授　岩崎英二郎殿
C 明治学院大学助教授　神保　信一殿
B 三井銀行会長　田中久兵衛殿
C 日本電気社員　飯泉　信殿
B 早稲田大学助教授　示村悦二郎殿
C 専修大学教授　西川　善介殿
C 東京女子大学教授　池宮　英才殿
C 上智大学講師　笠　耐殿
C 学習院大学助教授　江沢　洋殿
B 上智大学大学院生　長島　正殿
C 武蔵工業大学教授　下田　弘殿
C 東京都立大学教授　鈴木　二郎殿
A 東洋電具製作所社員　馬場　孝悦殿
A 小松製作所社員　宮川　俊彦殿
B 上智大学教授　小穴　純殿
B 上智大学講師　村上陽一郎殿
C 上智大学教授　押田　勇雄殿
C 神奈川大学教授　内田　芳明殿
B 明治大学教授　祖父江孝男殿
C 日本大学教授　杉山　逸男殿
C 上智大学国際関係研究所長　武者小路公秀殿
C 法政大学教授　栢野　晴夫殿

（以上申込順）

私の悲願

国公立というのは税金で建てた施設であるが、人間立という言葉をつくらなければ大学セミナー・ハウスの設立については十分な説明ができない。法律上は財団法人の組織であるが、人間の善意が結集して制度化したのが人間立大学セミナー・ハウスである。その精神を永遠につづけたいのが千人会である。「日本人とは何か」を一歩踏みとどまって考えさせる一里塚になってほしいのである。寄付者は金は出すが口は出さない。経営者は美しい金を効率的に使用する。もちろん不正な経理などは許されない。寄付者は事業の内容をよくしらべ、納得して義金を寄せる。利用者は他日、自分もその経営に参加するために千人会員になる。衆人が監視し、信頼し、尊敬し、支援すれば、その事業は健康に成長するにちがいない。

千人会は貧しい当財団を財政的に支持してくださる団体であるが、それ以上に精神的な支持と協力を現物で表明して下さったことに大きな意味を求めたい。金の切れ目が縁の切れ目といわれるが、一枚の年賀状が人の心を結ぶように、千人会の会費が当ハウスと会員であられる方々との心を結んでくれるのである。少しのことでは驚かない現代の若者も、このハウスが千人の義金で支えられていることを知ったら、人間の偉大さに驚嘆するであろう。

どうしても千人会を達成したいのが私の悲願である。現代の学生に明日の世界を信託したいからである。

（飯田宗一郎）

第25・26回大学共同セミナー

開館四周年記念として

◈主題◈日本人とは何か

■期日　第25回＝昭和44年11月1～3日
第26回＝昭和44年12月12～14日

＜全体講義＞―第二五回―
A日本人の思惟方法
東京大学教授　中村　元氏
B日本人の性格
東京工大名誉教授　宮城音弥氏
＜全体講義＞―第二六回―
A元法政大学総長　谷川徹三氏
B日本人の思惟方法
東京大学教授　中村　元氏
＜ゲスト＞―第二五回―
彫刻家・日本芸術院会員
清水多嘉示氏
＜ゲスト＞―第二六回―
朝日新聞論説副主幹
後藤　基夫氏
＜セクション指導＞
A近代化における町人哲学の意義
専修大学教授　今井　淳氏
B日本における仏教思想の受容
国学院大学教授　三枝　充悳氏
C武士道と現代
東京大学助教授　相良　亨氏
―第二五回―
東京大学助手　佐藤　正英氏
―第二六回―
D日本人・文化と国民性
明治大学教授　祖父江孝男氏
E中国の新旧とわれわれ
お茶の水女子大助教授
戸川　芳郎氏
F日本的感受性の泉をさぐる
東京大学教授　芳賀　徹氏
G徳川時代の思想と日本人―エリートの思想と庶民の思想をめぐって―
日本女子大教授　源　了圓氏
―第二五回―
G大正の精神史の諸問題
学習院女子短大教授
原　敬吾氏
―第二六回―

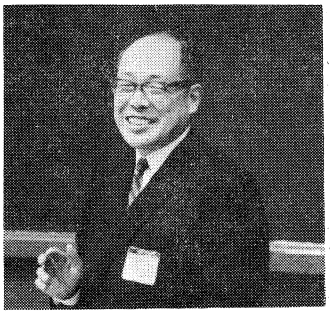
◈主題の主旨◈

断絶とか疎外とか自己否定とかの語がみちあふれているさなかに、「日本人とは何か、日本とは何か、日本文化とは何か、日本思想とは何か」を問うことが強く求められている。それらに対する強烈な自覚がなくて、たんに流行語をもてあそんでいても、なにひとつ建設的なものは生まれてこない。外国にひとり旅して、「日本人とは私だ」といいうるには、私たちはまだまだ自ら学ぶべきことが多いのである。

ここに日本の伝統・文化・思想に造詣の深い指導教授をはじめ、それらを培ってきた中国思想・仏教思想・外国文化などの専門家をも動員して、ともどもに講じ、討論し、ひとりひとりの自覚と反省とをもっともフレキシブルな形において、相互に、かつ集中的に受け入れつつ深めていくことができるならば、分散的な講義しか行なわれえない各大学の場合とは異なって、それこそ大学セミナー・ハウスにおいてのみ期待できる大きな収穫が得られるであろう。

◇　◇

この共同セミナーは開館四周年を記念して企画されたのであるが、期待どおりの成果をあげることができたのは、運営委員長三枝充悳教授の絶大な協力によるのである。この時代に最もふさわしい主題として、「日本人とは何か」を選び、それを日本人の思想成立のうちからたしかめてみようという意欲的な企画であるから、セクションの設定と指導教授の招致が重要なポイントであり、それを見事にやってくださったのは三枝委員長の熱意と、その友人たちが寄せられた友情であった。



全体講義を二回された中村元先生

はたせるかな、学生側の反響は大きく、応募された者四〇〇名を突破した。準備委員会はこの多数の申込書と参加理由を受けとめて、結局二回にわけて実施することになった。大学紛争の折柄でもあり、必ずしも教授陣は二回も同一人というわけにもいかなかったが、大部分の先生方は二度の務めをしてくださったので、大きな支障もなく学生側の要望に応えることができた。運営上から第一回は地方大学の学生と上級学年とし、第二回は主として都内大学と下級学年とした。

今回は創立当初からの協力者谷川徹三先生をお迎えすることができたのは、主題にうってつけな学者でもあり、好機会であった。中村元先生は共同セミナーには昭和四一年一月の「科学と宗教」以来二度目のご奉仕である。

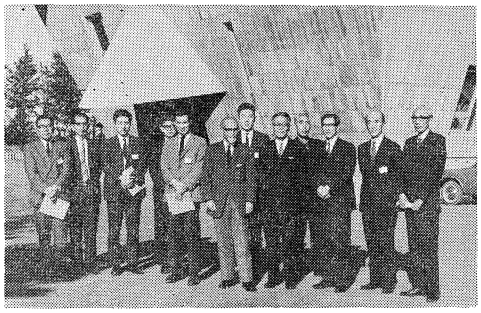
ゲストの清水多嘉示先生は開館式においでくださったり飯田専務理事とは格別の親交の間柄、そして先生にはその日に叙勲の栄誉を受けられたので、喜びをともにすることができた。

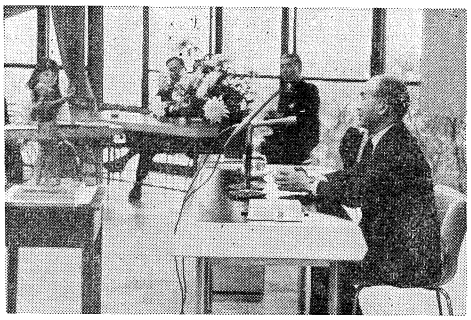
全体討議には増田四郎理事長が三上次男東大名誉教授をおつれくださったし、企画委員会の山内恭彦博士、川原栄峰早大教授、鈴木皇上智大教授も参加され、豪華な顔ぶれであった。

いつものことながら、夜は二時三時におよぶセクションもあり、大学紛争下で、日頃の勉強不足を補うに十分であったらしいが、この共同セミナーの一般的な評価は、昭和四四年一一月八日発行の毎日新聞学芸欄に詳しく紹介されている。同紙の林記者が自ら取材されたので、大学セミナー・ハウスが日本の大学と学生の中にすっかり根をおろした実態がよく記述されている。「日本人とは何か」は継続して開催したい主題である。今は古典となっている「国民性十論」以来、日本人を真正面から研究したのは、今回の共同セミナーが最初ではないであろうか。世界の中の日本を考えねばならない七〇年代を前にした好企画であったというべきである。

〈参加学生〉―第二五回―
一六四名（うち女子九四名）
日本女大（一七）、早大（一三）、津田塾大（一二）、東京女大（一〇）、慶大（七）、中大（七）、国学院大（七）、青山学院大（六）、聖心女大（六）、ICU（六）、外語大（四）、明大（四）、上智大（四）、一橋大（三）、東工大（三）、法大（三）、横浜国大（二）、立大（二）、成蹊大（二）、共立女大（二）、国立楽大（二）、明治学院大（二）、東京理科大（二）、独協大（二）、跡見大（二）、和光大（二）、聖徳短大（二）、共立薬大（二）、群馬大（二）、東大、学芸大、都立大、電通大、東京医歯大、神奈川大、武蔵大、東洋大、拓大、東経大、東京電機大、東京家政学院大、成城大、立正大、聖路加看護大、専修大、玉川大、東海大、昭和女大、千葉大、静岡大、信州大、山梨大、金沢大、高知大（各一名）

〈参加学生〉―第二六回―
一二三名（うち女子八一名）
津田塾大（二六）、早大（一五）、日本女大（一三）、東京女大（九）、埼玉大（五）、国学院大（五）、外語大（四）、青山学院大（四）、一橋大（三）、都立大（三）、立大（三）、共立女大（三）、中大（三）、上智大（三）、独協大（三）、東工大（二）、学芸大（二）、法政大（二）、明治学院大（二）、東京理科大（二）、東洋大（二）、横浜国大、慶大、成蹊大、日大、武蔵大、聖心女大、立正大、和光大、星薬科大（各一名）


「日本人とは何か」を討議された多彩な教授陣


清水多嘉示氏（自作の「緑のリズム」を前において）

造形の仕事

＊自然の完璧な条件を求めて

芸術院会員　**清水多嘉示**

絵画や彫刻といった造形芸術はどうあるべきであろうか。物を見る、あるいは考えるということから、自分の生命をゆさぶるような感動を受け、その感動を形におきかえていくことが造形芸術の仕事である。この場合、自分だけが持っている感動――超感受性と私どもはいっているが――が非常に大事である。その感受性を生かすことによって人の借物でない独特の創造ができる。表現をするには、彫刻なら彫刻の材料が必要である。今日では非常に多様な材料があるが、芸術の仕事としては永久に残るような作品を作ることが望ましい。近代は抽象的な形体でなくてはいけない、あるいはもっと進んで音楽を造形芸術の一分野として同時に働かせたり、電気で動かすというところにまで発展した、というより横道にそれた仕事が随分氾濫している。

私どもは、彫刻は物理的にはまったく動かないものであるけれど、生き生きと呼吸をしている、というものを作りたい。それが本当の芸術作品ではないかと思う。

それでは仕事として形とはいったい何であるかというと、結局自然が持っているような完璧な形体である。その完璧な条件を探し出すことが、芸術の仕事である。私どもの勉強の基礎、仕事の基礎はデッサンである。絵画も彫刻も、あらゆる角度からの、しかも奥行きをもつデッサンが大事である。

この基礎勉強は、作品をつくるなら死ぬまでつづけていくものであって、作品を作るという仕事は非常に素朴な仕事なのである。小さな作品でも、膨大な作品よりはるかに力強い高度なものがある。これは分析してみると、小さくても部分と全体とが必然性を持ち、働き合っているということである。

結局、デッサンというのは構造をしっかりつかんで形づくるという組み立てである。建築の場合の柱や梁という材料がどうしたら最も強靱な構造になるかということと同じである。厳しく計算して、どこも直すことができないというギリギリのところまでせめていく仕事が良い仕事である。名作といわれる作品は、どうにも動かすことのできない必然的なものの方向、分量、大きさの比例が考えられている。この程度で大体感じが出たということでは、ごく甘い仕事になってしまう。そういう意味で、私どもの仕事は随分苦しい仕事なのである。

さらに比例とは、端的にいうと数である。真実の表現は数であるといってもよい。湯川秀樹さんが宇宙の真理とは数であるといっておられたことがあったと記憶しているが、そういう学問と私たちの芸術と、真理は同じであると私は思う。

（第二五回大学共同セミナー、ゲスト講演より）

●予告＝第二七回大学共同セミナー●

△期日▽昭和四五年二月二四・二五・二六日
△主題▽一九七〇年代の都市問題―ニュータウンと再開発の検討―
《全体講義》
人間都市の理論と宣言　東洋大学学長　**磯村英一**
新しい生活空間　東京大学教授　**高山英華**
《セクション指導》
岡野行秀（東京大）、**石原舜介**（東工大）、**藤竹暁**（NHK総合放送文化研究所）、**鈴木武夫**（国立公衆衛生院）、**赤木須留喜**（都立大）

虚学に託して

共同セミナー印象記

お茶の水女子大学助教授　戸川芳郎

多摩丘陵の斜面は、晩秋の薄暮をまだら色につつんで、沈むようにかすんでゆくのだが、深更に、降りそそぐ星空を仰いでたつと、そこは俗塵を絶して、まさに透明であった。

そんななかに、漂亮としてセミナー・ハウスの建物が、爪さき立った危うさで駆けのぼるように建ちならんでいる。群れる学生はおしなべて熱っぽく貪欲である。そのいちいちの期待は、怨望ただならぬまなざしに露わなのだ。そんな学生に終日かこまれて、講師のボクは足つきもどかしい病みあがりのように、ひとことの応答にも不安の感覚をぬぐえないでいる。

＊　＊　＊

「辞ハ達スルノミ」と古聖はいう。〝言語は意思の伝達道具〟とするのには、べつに反対できない。しかし言語作品のすべてが、人間の意識内容の、誰かれなく了解しうる交信手段だ、とするような俗説には同調しかねる。「言ヲ察シテ意ヲ知ル」とは許学、つまり訓詁の学にのみ溺れる徒輩の口にすること。世はしかし単純ではない。所詮、「言ハ意ヲ尽サザル」もの、「書ハ言ヲ尽サザル」もの、というべきである。なにがしかの考拠のみで証明されるほど、人間の心境は学にあまくはない。〈易〉と〈説文〉は初学の敬遠してしかるべきものなのであるが、あえて択一を迫るのならば、もとより周易の蹟隠深遠なるにしくものはあるまい。ボクは、いま引いたその繫辞伝の語に倚することもちろんである。意（意思――意味）を表現しきれない言、言（言語）を記録しきれない書、この書（文字――文章）にこそ中国の言語（漢語）の秘密がやどるもの、と考えられないか。書は意をあらわに現示するもの、という考えは、そこにはない。文字、それは原来、隠微なるものなのだ。

かくて中国の文字（漢字）は、まずは表記手段としては尽さざるものであるが、かえってその内奥にふかく意を退蔵することができる。この退蔵して隠伏した意――微言大義――を探索すること、つまり索隠し発微することこそ、文献の解釈を完全にする方途なのである。大義に触れ微言を発露せしめることをもって、中国の文字文献をあつかうものの本領とされるゆえんである。しかも、その文字文献は、以上のような形を徹底してとることにおいて、つねに哲学へ、文学へとつらなり、それに挑むところに、思想研究、文学研究がなりたつ。

一字を一訓のもとに、過不足なくおおいつくすことの困難さは、この文字のもつ意味が、アメーバ状に茫洋と拡がりを保ちつつ運動していて、その核心に中肯しがたいところにある。書の背景の言にしては、なおさらのことである。

中国の文字文献に泥んでひさしいボクは、コトバをこんなにも考えている。読書の世界にひたること、すなわち一字の訓詁と隠微なる意味の世界を発明することに、もっぱら心をついやすこと。それは、微かにすけて見える盛装の裏の、したたかな麗人のはだえに眼を凝らすに似て、他言を用いぬ老熟した境地でもある、とでもいおうか。いささか精励と年期を積まねばならぬことだが、愉快きわまりないことと思ってよい。

＊　＊　＊

さて、ボクにもお鉢がまわって、通じがたいコトバで、まことしやかに学生のお相手をしなければならなかった。〝日本人とは何か〟で、逆に彼らから、それをうかがおうと狙った。彼らは、啓蒙主義、教養良識主義、権威主義、近代主義、あらゆる主義のマナーにかこまれて、せっかちで、爪さき立ち、人生街道とやらに擁擠していることを、ボクは虞れた。なるほど熱っぽい学生たちは、思慮の浅さと理解の速さにおいて、愛すべきであったが、貪欲と濶達において、まさに畏ルベシであって、ボクは徹夜の討議（遊戯まじりの）に満足した。

それは、討議の内容にボクが満足したというのではなくて、古来、青年が発揮したであろう熱情が、ここに失われずに現にあって、そこに真の導率があたえられれば、おそらくは未来の実践に何らかの飛躍を招くであろう、という、そら恐ろしくかつ戦慄の伴う喜びが感じられたことである。

しかし、ボクは、持する主張があって、彼らを導こうとしたのではない、せいぜい対処しえたのが、さきのような読書感にすぎない。一字を忽諸にせず、文字文献の尊重を訴えて、中国の理解、ひいてはわが国の現状の反省をもとめ、学生の躁急をいましめるつもりでくりごとめいたことをしゃべったのであるが、日常性打倒を説いてやまない彼ら〝日本人〟学生は、どれほど彼らの日常を自覚してくれたことであろうか。

世に学の虚実を論ずるものがある。産学・軍学・政学の一体を説いて、開かれた大学の経営を云々し、学生をさらに躁急に駆ろうとするのは、実学の先端のごとくきこえてくる。透明な天空に、夜ごと近づくここセミナー・ハウスの地は、虚学をモットーとするようであり、さいわいボクは、またとない学生に出会って、効用すくない読書論のできたことをしあわせとするものである。

時あたかも、開館四周年にさいし、あわせて飯田宗一郎さんの華甲のよろこびを迎えようとしている。実を盛る虚器の大ならんことを念願して、日夜奔走をつづけられる専務理事のご健勝を、ここに祈らずにはいられないのである。

（大学共同セミナーのセクション指導教授として参加された感想をお寄せくださいました。）

筆者（前列左）とセクションの学生たち

学生自主セミナー ＊初めての試み＊

■主題＝明治と現代　■期日＝昭和44年10月4・5日

このセミナーは、四三年六月に行なわれた新入学生歓迎セミナーの送別パーティで、飯田専務理事が「学生も先生も共に同じメンバーで来年もこの丘に集まり、一年間の成長を確認し合うことができたらと考えると楽しい」と話されたことから、参加学生の有志があたためてきた念願の企画である。

全体講義に当ハウスの企画委員長の松田智雄先生という適任者をえて、さらにセクション指導の諸先生のご協力により、企画から運営まですべて学生の手で行なわれた、同窓会の意味をもつセミナーであった。

＜全体講義＞

近代化の日本的構造論　東京大学教授　松田智雄氏

「これはいける」おでん、おすしの立食お別れパーティ（学生自主セミナー）

＜セクション指導＞

A早稲田大学教授　川原栄峰氏
B上智大学教授　鈴木　皇氏
C東京大学助教授　芽賀　徹氏
F一橋大学助教授　深沢　宏氏
G学習院大学教授　児玉久雄氏

＜参加学生＞

四七名（うち女子三一名）

日本女大（一九）、早大（五）、津田塾大（三）、法大（三）、東京女大（二）、青学大（二）、共立女大（二）、専修大（二）、東大、一橋大、中大、武蔵大、千葉大、聖心女大、信州大、学習院大、独協大（各一名）

セミナーを運営して

早大二年　近藤雅也

学生主催のセミナーはどうやら無事に終わったが、われわれ企画委員は、今回のセミナーが真に学生の手によったとは決して思っていない。というのは、「準備」の内容が事務以上のものではなかったからだ。

当初、われわれはいっさいの仕事を引き受けると気負い込んでいたが、重荷がますにつれ、こういった煩雑な事務を処理する機関としてのセミナー・ハウスの存在をはっきり知った。われわれは学生参加をはきちがえていたようだ。事務は煩雑だから学生はしなくてもよいというのでは決してない。しかし、われわれのできる範囲で学生参加にふさわしいことは何であろうか。第一は個々の研究の結果生まれてきた問題意識を基礎に、テーマを設定すること、第二は先生方の助言によって指導教授を選定することだ。

これらのことは学生の力量を考え合わせると、どれほど価値ある選択ができるか不安でもあるが、このことこそ学生が主体であるか否かの分岐点ではなかろうか。

しかし、以上の二つを満たすには学生間でかなりの研究が必要である。このことは今回のセミナーにおいて、「勉強不足」とか「セミナー・ハウスはただ話し合うだけの場ではない」といった先生方の批判に痛烈に示されるごとく、われわれに欠けていた重大な点であって、真に学生主催セミナーがなされなかったとする理由である。事前に各セクションごとの読書会を開いたり、あるいは一週間ほど合宿したのちでセミナーに参加するといったような方法が考えられよう。

今回のセミナーの端緒は同窓会ということであったが、単なる同窓会では意味がない。昨年や今度のセミナーが土壌となり、読書会や研究会をつづけていって、今後の学生主催のセミナーの中核を形造っていくようになれば幸いである。

小さな朗報

切手の販売

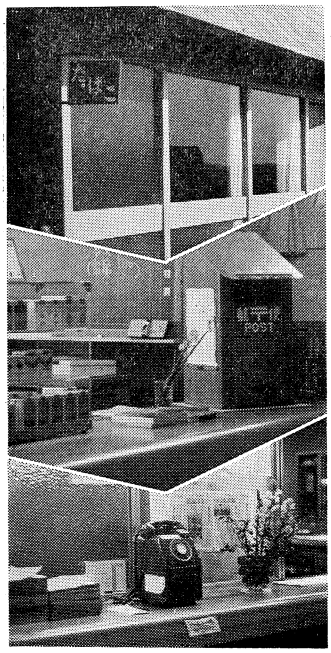
「郵便切手類及び印紙売りさばき人指定」の認可が八月一日付で下付されたので、さっそく販売を開始している。利用者の便宜がよくなり、大変好評。ちかく構内ポストも設置される。

赤電話

利用者が多ければ電話も多い。交換台はいつも多忙。それで自分でかけられるように「赤電話」が一台八月七日に設置された。二台申請していたが、どうも当分はだめらしいが、ひとまず不便は解消したようだ。

たばこの販売

「たばこの小売人に指定する―特定七等地」という認可が九月三〇日付で下付されたので、正式な小売人になったわけである。サービス・センターの売店や本館フロントでも販売している。利用者の便宜が一段と改善されたわけである。売上げの一部が手数料として当ハウスの収入になるので、贈答品にたばこを使う場合は、当売店を利用されるようお願いしたい。



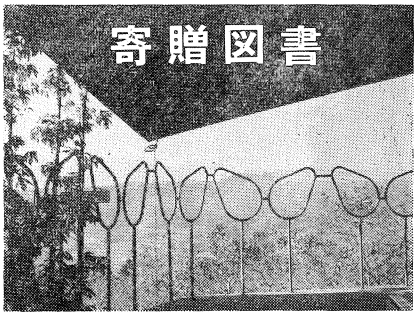
ソニーのテープコーダー寄贈

講堂の録音装置は年来の希望であったが、ソニーの好意で同社の優秀な新製品 TC-777M という大型のテープコーダー二台が寄贈され、一一月一〇日に受領する。講演、セミナーの研究発表などの記録に利便は絶大である。これを機会に講堂の一隅に録音室をつくる計画である。

ゴミの処理場の新設

ゴミの焼却炉の側に、屋根のあるゴミ処理所が新設された。学生は帰りに各自の部屋やセミナー室の紙くずをこの処理所まで、運んでほしいのである。場所はサービス・センター南側斜面、洗面所へ行く途中である。特筆すべきことは、この処理所は、当ハウス職員の設計と作業によって建てられたことである。

寄贈図書



カットは図書館のバルコニー
ここから富士の眺望が美しい

【昭和44年8～12月】

「岩波講座　世界歴史」第一五～二二、二、八巻「岩波講座　哲学」4巻　岩波書店殿
「大塚久雄著作集」第七～九巻　大塚久雄殿
「国際問題」No一一三～一一七巻　日本国際問題研究所殿
「経済学史の哲学」　武藤光朗殿
「世界の名著」三六冊　中央公論社殿
「プレリュードI」　野坂穣殿
「大原恭子先生記念英米文学論集」　日本女子大学英文学科研究室殿
「慶応義塾百年史」上・中・下・別巻　飯田宗一郎殿
「英詩の文法」「C・C・フリーズ」「言語と意味」　池上嘉彦殿
「電子工学演習」上・下巻　末武国弘殿
「政治経済史学」七八～八〇号　彦由一太殿
「勝つためのマーケティング」
「雇用管理II」「営業費の効果的使い方」「社会会計と経済モデル」「新しい人間関係管理」「ヨーロッパ合衆国」「広告のチェックリスト」「新しい会計学3」「ワークデザイン」「生産システム設計ハンドブック」「マーケティング会計」「直接原価計算」「職務給／考え方進め方」「経済変動論」「広告概論一二章」　早稲田大学生産研究所殿
「大河内一男著作集」第三巻　大河内一男殿
「物理法則はいかにして発見されたか」　江沢洋殿
「オスカー・レルケ詩集」　神品芳夫殿
「会報」第四号　大河内記念会殿
「医療と人間」「家族治療の基礎理論」　岩井祐彦殿
「ロダン」　清水多嘉示殿
「賃金管理論」　島袋嘉昌殿
「現代物理学の考え方」「異色の人間像」「日本の近代化」「学生を思う」「世界に呼びかける東洋」「哲学のすすめ」「美に生きる」「BC兵器」「科学と人間」「平和へのただ一つの道」「創造性の開発」「明日への良識」「科学と現代」　山内恭彦殿
「ヘンリー・ジェイムズ短編選集第二巻」　川西進殿
「続私の信条」　小島憲正殿
「歴史の研究」第一〇巻　佐藤喜一郎殿
「市民のための経済入門」　力石定一殿
「建築学大系九—II」　松井源吾殿
「東と西」「西欧市民意識の形成」　増田四郎殿
「ゲルマン民族の国家と経済」　谷川徹三殿
「宇宙と心の世界」
「社会学論叢」No四七　笠原正成殿

——◇——◇——

開館四年目の暮で蔵書は一、二四八冊。やっと一、〇〇〇冊を越えた。このうち購入図書の占める割合は全体の二割だから、ほとんどが先生方のご著書や、その他のご好意によって寄せられた図書である。分類別にみると哲学、歴史経済が多く、自然科学、文学が最も少ない。来年度の図書費の予算は一〇万円。せめて三、〇〇〇冊は揃えたい。

先生方や学生たちが入って来て、「本がまだ少ないようだね」といわれるので、係の職員はさびしいようだ。それでも環境は静かだし、つかれた頭をいやすに足る自然の風景は美しいので、学生が二、三人で卒論書きなどに一週間来ることもある。一人で文学書などを読んでいる学生があるが、これは賢い利用者である。

図書センターをつくれという要望は多いが、それを目標にして美しい気品のある図書館にしたいものである。図書購入のため、図書基金がほしいものである。

利用状況

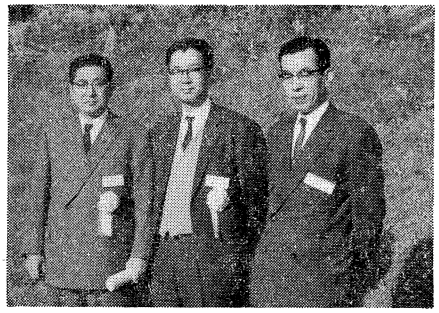
■八月

順天堂大学助教授　下　康郎
法政大学助教授　関口　恒雄
東京学芸大学教授　太田　善麿
基督教共助会夏期研修会
立石電機部内研修
アスター精機全国販売研修会
日本女子大カウンセリング研究会
東京大学助教授　池上　嘉彦
立正大学教授　石川　与吉
上智大学助教授　岡村　秀勇
松原教会修養会
東京学芸大学助教授　団野　隆暲
中渋谷教会夏期修養会
伝熱研究会夏期セミナー
家族社会学セミナー
恋ヶ窪教会修養会
東京都立大学助教授　桐敷真次郎
渋谷区役所夏期特別学習会
慶応義塾大学講師　古田　暁
国際経済商学学生協会
語学教育振興会　木村　重義
一橋大学哲学研究会　松島　精
法政大学助教授　霜島　甲一
ピラニア英語研究会　森　喬伸
東洋大学講師　志摩　陽伍
東京理科大学教授　宇喜多義昌
用賀教会修養会
東京大学教授　小倉　安之
目白学園女子短大教授　片山　清一
独協大学講師　杉山　好
松下電器立川営業所十五日会
浦野学園幼児教育研修会
日本地域開発センター　松岡　達郎
埼玉大学助教授　丹下　博之
共立女子大学国際問題研究会
杉野女子大学講師　片岡　哲治
日野自動車協力会研修会
東京大学助教授　大須賀節雄
日本印刷技術協会管理者研修会
AFS日本協会　斉藤　泰雄
社会思想研究会　関　嘉彦
中央大学教授　岩尾　裕純
日本グループダイナミックス学会
亜細亜大学講師　馬場　房子
上智大学助教授　小林　純一
専修大学講師　松原　成美
東京経済大学教授　箸方　幹逸
日本建築家協会建築学生セミナー
東京経済大学講師　橋口　英俊
慶応義塾大学教授　石川　明
上智大学教授
ヴェンデリーノ・ローシャイター
東京都立大学教授　千葉　正士
東京大学助教授　和田　春樹
日米学生会議　原　研彌須
慶応義塾大学グループ研究会
日本大学助教授　石川　才顕
慶応義塾大学講師　渡辺　彰
法政大学教授　霜島　甲一

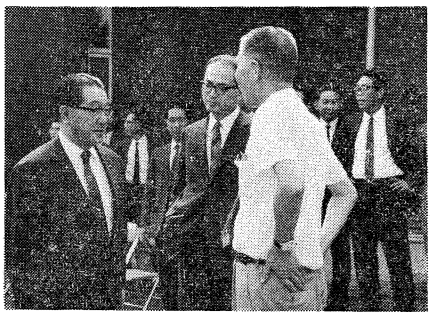
■九月

立教大学教授　神島　二郎
明星大学写真部編集セミナー
早稲田大学助教授　森藤　一男
一橋大学一橋研究誌編集委員会
京王帝都電鉄第六回次課長研修会

旭電化工業社内教育研修会
エーザイ事務管理研修会
国立音楽大学教授　熊谷　孝
武蔵大学助教授　中村　瑞穂
九州大学助教授　中島　直忠
中央大学教授　岩尾　裕純
明治学院大学助教授　増田　茂樹
東京女子大学部落問題研究会
慶応義塾大学教授　平松　幹夫
慶応義塾大学助教授　佐藤　方哉
慶応義塾大学教授　千住　鎮雄
東京YWCA研修会
三輪精機ワークデザイン研究会
和光大学助教授　中野　光
青山学院大学教授
G・デヴィード
品川ナショナル販売研修会
青山学院大学助教授　柴川　林也
東京学芸大学助手　岡崎　恵視
東京大学助教授　池上　嘉彦
慶応義塾大学講師　古賀慶次郎


文部省の研修会で、左から須田庶務課長、村山大学学術局長、吉川留学生課長

千代田運輸職員セミナー
永福町教会修養会
上智大学教授（F会）　鈴木　皇
日野自動車係長基礎研究会
三菱金属鉱業研修会
早稲田大学教授　吉谷　龍一
東京都立大学講師　田中　宏
早稲田大学教授　中尾　清秋
順天堂大学医務課業務改善研修会
工学院大学助教授　長坂　舜二
慶応義塾大学教授　小林　忠義
法政大学教育学科勉強会
東京女子大学クラブ勉強会
東京経済大学教授　井野　隆一
日本女子大学教授　天羽　大平
松本亨英語教育研究会
明治大学教授　池上　秋彦
東京学芸大学助教授　稲毛　卓
上智大学助教授　林　邦夫
立教大学教授　川鍋　正敏
セントラル自動車管理者研修会


三菱金属の相良社長が社員研修で来訪

本州製紙アイデア開発研修会
青山学院大学助教授　柴川　林也
東京工業大学教授　永井　道雄
早稲田大学助教授　北野　弘久
東京都立大学助教授　山田　絆一
法政大学教授　内山　尚三
立正大学教授　石川　与吉

■十月

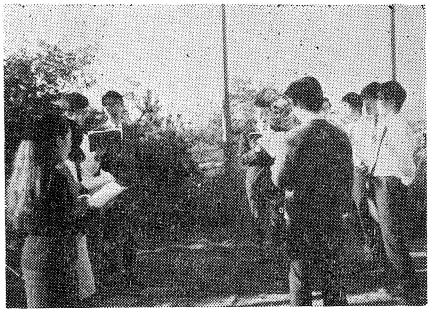
学習院大学教授　末松　保和
都立高専助教授　竹前　栄治
日本印刷技術協会職員研修会
成蹊大学実業研究会
日本女子大学助教授　吉田　正昭
拓殖大学教授　佐藤　和男
立正大学教授　杉沢　新一
京王帝都電鉄次課長研修会
三菱信託銀行金融問題研究会
学生自主セミナー
キャンパス・クルセード
東京学芸大学教授　鈴木　清
慶応義塾大学教授　大塚　保治
国際基督教大学ギタークラブ部会
津田塾大学グループ勉強会
フェリス女学院大学教授
堀　信一
早稲田大学生産研究所
津田塾大学英語コンプリ勉強会
上智大学国文学研究会
三菱信託銀行金融問題研究会
東京女子大学教授　根岸　愛子
早稲田大学講師　中根甚一郎
電電公社電気通信研究所聖書研
松本亨英語教育研究会
早稲田大学生産研究所阿保研究室
立教大学助教授　野々口格三
早慶立合同研究会
東京経済大学教授　向井　武文

東京告白教会聖書研究会
東京学芸大学助教授　松崎　奈岐
慶応義塾大学教授　中村　菊男
東洋大学教授　呉　主恵
立教大学助手　岡　利郎
慶応義塾大学教授　千種　義人
立教大学助教授　大橋　泰二
セントラル自動車管理者講座
中央大学教授　稲垣冨士男
日野自動車管理者研修会
東京工業大学教授　松田　武彦
立教大学教授　三宅　義夫
明治学院大学英文学科エコー
八箇　克彦
明治学院大学助教授　倉地　幹三
東京大学助教授　大須賀節雄
武蔵工業大学教授　古浜　庄一
青山学院大学助教授　能見　義博
日本学生セミナー実行委員会
明治学院大学助手　志賀　実子
早稲田大学教授　吉阪　隆正
首都圏協会
小田急不動産中堅社員研修会
文部省大学学術局厚生補導協議会
慶応義塾大学助教授　池井　優
早稲田大学教授　加藤　栄一
電気通信大学教授　大須賀政夫
東京工業大学教授　永井　道雄
上智大学ディベイトセクション
共立女子大学教授　谷　信一
東京都立大学教授　徳田　種樹
都立商科短期大学同人黎徨
東京都立大学教授　小島　守生
玉川大学教授　戸川　尚
法政大学教授　実方　謙二
青山学院大学助教授　徳久　球雄
一橋大学助教授　田内　幸一

早稲田大学教授　松田秀次郎
明治大学教授　神田　信夫
東京都立大学助手　渡辺　徹

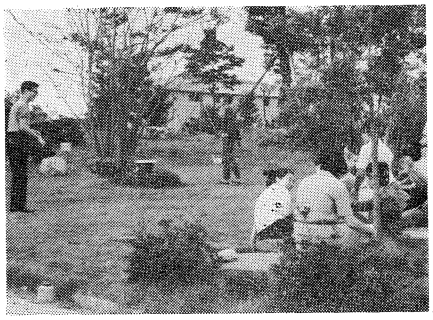
■十一月

日本女子大学助教授　古沢　頼雄
第二五回共同セミナー
日本女子大学教授　井上百合子
拓殖大学助教授　岡田　一呂
白百合学園高校修養会
東京都立大学教授　小島　守生
日野自動車研修会
大学英語教育学会
津田塾大学助教授　一又　民子
慶応義塾大学助教授　飯吉　厚夫
東京都立大学助教授　奥山　典生
立教大学助教授　近藤　晃
成蹊大学教授　武田　昌輔
一橋大学教授　岩田　一男
上智大学講師　井口　樹生
慶応大学教授　内山　正熊
明治大学講師　牧野　誠一
東京YWCA青年会議
上智大学助教授　吉田　裕
東京都立大学教授　金沢　孝文
法政大学教授　篠原　三郎
東京経済大学教授　江夏美千穂
慶応大学教授　内山　正熊
慶応大学システム科学ゼミ
立正大学助教授　斉藤　昌男
東京学芸大学教授　東　一夫
東京都立大学化学科セミナー
明治大学教授　長谷川昭彦
埼玉大学教授　久保　応助
東京大学教授　松田　智雄
文部省留学生担当者研修会
慶応大学教授　山本　登
帝京大学講師　渋谷　将



早朝の歌ごえ（玉川大・戸川ゼミ）

職業訓練大学校教授　宗像　元介
慶応大学講師　渡辺　彰
トヨタオート横浜研修会
大妻女子大学教授　天野　一夫
会計検査院調査報告書作成会議
青山学院高校修養会
八王子西ロータリークラブ
東京大学助教授　池上　嘉彦
アスター精機研修会
東京都立大学助教授　高田　清郎
日本女子大学教授　遠藤　卓夫
慶応大学講師　井関　利郎
法政大学助教授　三浦　徳弘
法政大学教授　岩下　秀男
東京神学大学助教授　大木　英夫
東京告白教会神学研究会
電気試験所報告書作成会議
早稲田大学中南米研究会
東京都立大学助教授　竹内　幹敏
東京都立大学教授　小野　記彦
慶応大学助教授　池井　優
慶応大学教授　村井　実



ゲームに興じるある日の午後
――中央庭園の芝生で――

東京都立大学建築助手会ゼミ
東京都立大学講師　梅垣　高士
東京教育大学助教授　高橋　恒郎
一橋大学助教授　竹内　啓一
東洋大学助教授　藤木三千人
東京工業大学教授　阿武　芳郎
小児療育相談センター
慶応大学教授　須網　哲夫
早稲田大学教授　村松林太郎
日本山岳協会海外登山技術研究会
工学院大学助教授　荻原　正三

■十二月

早稲田大学碧稲会　川原　栄峰
早稲田大学教授　日下部与市
立教大学教授　敷田　礼二
明治学院大学助教授　神保　信一
早稲田大学教授　鶴岡　義一
早稲田大学教授　加藤　栄一
早稲田大学教授　新澤　雄一
明治学院大学助教授　増田　茂樹
日野自動車工業（管理者研修）
上智大学助教授　山下　栄一
慶応義塾大学教授　小茂鳥和生
東京経済大学助教授　北田　芳治
日本女子大学教授　杉溪　一言
東京都立大学講師　関　嘉彦
共立女子大学講師　竹中　昌宏
慶大・東大医学部耳鼻咽喉科学教室（合同教室集談会）
一橋大学教授　岩田　一男
早稲田大学教授　内田　満
東京女子大学講師　笹尾　靖也
慶応義塾大学国際法研究会
中央大学助教授　村田　稔
一橋大学体育会（リーダース・キャンプ）
東京都立大学助教授　石川　武志
一橋大学教授　山城　章
早稲田大学生産研究所
中央大学助教授　鮎沢　成男
国連協会東京都本部学生部
慶応義塾大学助教授　日比野真一
立教大学教授　鵜川　馨
法政大学教授　栢野　晴夫
早稲田大学助教授　三島　康雄
通産省電気試験所
共立女子大学教授　小川　文代
東京女子大学短期大学部（二年次カンファレンス）　川村　輝典
上智大学学内共同セミナー
アンセルモ・マタイス
上智社会福祉専修学校（障害児者問題研究会）　神藤　克彦
日本原子力産業会議原動研・計装制御グループ
武蔵工業大学教授　吉野　利男
明治学院大学教授　岡島　真理
上智大学講師　米川　哲夫
青山学院大学教育学科Qクラス
日本女子大学助教授　古沢　頼雄
工学院大学助教授　長坂　舜二
慶応義塾大学教授　渡部　一郎
国立音楽大学教授　熊谷　孝
法政大学教授　力石　定一
中央大学助教授　松本　正徳
慶応義塾大学教授　山本　登
杉野女子大学助教授　田村　皖司
早稲田大学建築学科（過疎問題ゼミ）
慶応高校ライブラリークラブ
慶応義塾ワグネル・ソサエティ男声合唱団
東京都立工業高等専門学校助教授　矢野　正
政治経済史学会　彦由　一太
東洋大学教授　園田　義道
上智大学助教授　小林　純一
文学教育研究者集団　荒川　有史
慶応義塾大学管理工学科
野呂　影勇
中央大学教授　桜木　澄和
早稲田大学教授　坪内　和夫

■専務理事ノート

幸わせなことに、今年も松下館屋上の真理の鐘をならし、除夜の経験を重ねることができた。数々の温かいご支援を思い返し、感謝の祈りを捧げた。

今年の圧巻はなんといっても敷地拡張―土地問題―に全力投球したことである。事の緊急性を認識された財団理事会も企画委員の諸教授も奉仕グループの学生諸君も、挙って応援してくださった。国会議員も文部大臣も手を借してくださったが、結局頼りになったのは、三井銀行の佐藤喜一郎氏だけであった。単なることばではどうにもならない問題である。

永井道雄教授の著書「大学の可能性」が中央公論社の吉野作造賞をうけられ、その授賞式が十月十六日東京会館で行なわれた。たまたま開館前の控室で、蠟山政道、中山伊知郎、松本重治の三長老にお目にかかった。セミナー・ハウスの成功を喜んでくだされ、ことに蠟山先生が「セミナー・ハウスが大学紛争が起きてから考えられたものでないことは意義が深いネ」と評価してくださったが、セミナー・ハウスは、単なる学生対策でないことは、この五年間のセミナー活動によって十分証明したわけである。

年の瀬の二十九日に上代たの先生から「上善如水」という新渡戸稲造博士の軸をいただいた。戸川芳郎先生にその出典を問うたら「老子第八章第一節」にあることを教えてくれた（中央公論社「世界の名著」第四巻）。この丘を訪ずれる人が、この書を読み、最上の善とは水のようなものだということをしばし考えられるであろう。争わずして、すべての人がさげすむ場所にも水は恵みを施しているのである。この額を眺めて私は日日反省させられる次第である。